優雅な庵屋台と華麗な曳山行列、桐の花咲く坂の町に紫の香りが流れる。

[曳山]

## 一番山 西上町 竹田山（たけだやま）

安永年間、小原治五右衛門の作
（1772～1781年）　板車
四方一文字の屋根、平天井

## 二番山 東下町 東耀山（とうようやま）

享保年間の作を改修・増補
（1716～1736年）　幅車
前後唐破風の屋根、格天井

## 三番山 出丸町 唐子山（からこやま）

享保年間の作を改修・増補
（1716～1736年）　板車
前後唐破風の屋根、平天井

## 四番山 西下町 諫鼓山（かんこやま）

享保年間の作を改修・増補
（1716～1736年）　板車
三方唐破風の屋根、平天井

## 五番山 東上町 鶴舞山（つるまいやま）

安永年間、小原治五右衛門の作
（1772～1781年）　幅車
千鳥・唐破風二重屋根、平天井

## 六番山 大工町 千枚分銅山（せんまいぶんどうやま）

明治31年の大火で類焼、同39年
浅野喜平・辰次郎の作。　幅車
四方唐破風の屋根、平天井

[御神像]

### 恵比須
《寛政7年（1795年）、荒木和助の作》

### 大黒天
《安永3年（1774年）、荒木和助の作》

### 布袋
《宝暦12年（1762年）、荒木和助の作》
《弘化3年（1846年）、小原治五右衛門改作》

### 堯王
《享保元年（1716年）、木屋仙人の作》

### 寿老
《安永2年（1773年）、荒木和助の作》

### 関羽・周倉
《寛政8年（1796年）、荒木和助の作》

[庵屋台]

[庵唄]

### 松風
恵友会

〜風になりたい　今宵の風に　人に知られず　さとられず
遠い夜道を　駆け抜けて
愛しい人の　松の枝　鳴らしてみたい　さわ〜〜と

〔解説〕平成八年（一九九六）一一月「ふるさとみらい21・城端」地域活性化総合イベントが開催され庵唄新歌詞の募集をおこなった。優秀賞に辻井修（滋賀県）の「松風」が選ばれた。大和楽家元の大和久満（芳村伊十七）が作曲している。

### 雪巴
宝槌会

雪は巴に　降りしきる　屏風は恋の　仲立ちや
蝶と千鳥の三つどん　元木に帰る　ねぐら鳥
まだ　口青いじゃ　ないかいな

〔解説〕雪が深々とたくさん舞う夜、一人部屋で想いを寄せる男を待つ遊女。二人の為にしつらえた部屋には二人の恋をとりもつ屏風がある、愛し合うために贈ってくれた布団もある。だけどなぜあなたは来ないのでしょうか、もとの場所へ帰ってしまうの？私を抱かないまま…。という遊郭の女性の心情をしっとりと唄った名曲でございます。雪の降る夜は、熱も音も吸い取ってしまうように、相手の心からも奪い取ってしまうのかもしれません。何とじれったいものなのでしょうか。

端唄の原曲は「雪は巴（ゆきはともえ）」という題名ですが、ここ城端では親しみをこめて庵唄の「雪巴（ゆきとも）」と呼んでおります。

### 川竹
布袋同志会

川竹に浮名を　流す島さえも
つがいはなれぬ　をしどりの
中に立つ月　すごすごと
別れの辛さに　袖しぼる
ほんにしんきな　ことじゃいな

〔解説〕（江戸端唄系）文久二年（一八六二）の『粋の懐』に掲出されているが、「川竹」とは古くから遊女の代名詞である。浮れ女とも言って、川辺に生えている竹のように川水に押し流されて浮いたり沈んだりしている事からこの名が起きた。「つがいはなれぬおしどりの」は、好きな人があっても所詮は別れてゆく運命を背負っている、遊女とはまことにはかない境遇だと嘆いている。

### 夕暮
諫鼓共和会

夕ぐれに　眺め見渡す　隅田川
月に風情を待乳山　帆上げた舟が見ゆるぞえ
アレ鳥が鳴く鳥の名も　都に名所があるわいな

〔解説〕（上方端唄系）端唄の代表曲として有名であるが、安政四年（一八五七）の『花生一夕話』（歌沢能六斉著）に、最初歌舞伎狂言「鏡山」岩藤の場の下座に使われた上方唄と記されている。

後に江戸端唄として洗練された曲調となり、殊に江戸とは関係の深い隅田川の風景なので流行した。元唄は「あれ鳥がなく鳥の名も、都といふ字があるわいな」であった。待乳山は隅田川の左岸にあって、古くは松山との由。

### 我がもの
松声会

我がものと思えば　軽き傘の雪
恋の重荷を肩にかけ　いもがり行けば　冬の夜の
川風寒く千鳥なく　待つ身につらさ置こたつ
実にやるせが　ないわいな

〔解説〕（上方端唄系）文久頃（一八六一～六三）大阪から出版された『粋の懐』に掲出されている曲が、後に多少歌詞が訂正されて江戸端唄となった。唄い出しは榎本其角の俳句「我が雪と思えば軽し傘の上」を借用し、雪の夜に愛人（妻）のもとに通う男心を唄っている。

妹許は、男が愛人もしくは妻のもとへ通う日本古代の風習を詠んだ言葉で、平安時代の通い婚にもとづくもので、川風が吹き遠く千鳥の啼く夜の心細さを描いている。

### 辰巳
冠友会

辰巳　よいとこ　素足が　歩く
羽織や　お江戸の　誇りもの
八幡鐘が　鳴るわいな

〔解説〕（江戸小唄系）昭和中期の新作小唄の代表作品で、作詞者は伊東深水、作曲は常磐津三蔵のコンビである。これを機会に後の「辰巳の左褄」が出来るが、「辰巳」は深川仲町の花柳界は江戸城から東南（辰巳）に当たるのでこの名称が生まれた。羽織芸者の素足が売り物で江戸っ子の人気を得たのである。「八幡鐘」は深川八幡の刻の鐘を指し、曲は三下りから八幡鐘で本調子に替る粋な手附となっている。いかにも小股の切れ上がった曲といえよう。

[庵唄] 解説：「端唄の流れる里　桂書房」引用